

・ 分担研究報告

2 . 注意欠陥多動性障害 (ADHD) 児と家族の支援ニーズに
基づいたレジリエンス向上に関する研究

研究分担者 山下裕史朗

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

注意欠陥多動性障害（ADHD）児と家族の支援ニーズに
基づいたレジリエンス向上に関する研究

研究分担者 山下裕史朗
久留米大学医学部小児科 教授

研究要旨

Summer Treatment Program(STP)介入前後で保護者のレジリエンスに関わる心理的尺度（POMS, KID-KINDL 保護者・子ども版）の変化の検討を行った。対象は、2009～2012年にくるめ STP に参加した小学校 2～6 年の子どもとその保護者で、子どもには「小学生版 Kid-KINDL(以下「子ども QOL」と言う)」、保護者には「親版 Kid-KINDL(以下「親 QOL」と言う)」、ADHD Rating Scale、POMS 短縮版を用いた。親子ペアともに 3 回（参加前 7 月、参加後 9 月、3 か月後 12 月）のデータがそろっていた 54 組（男児 48 名、女児 6 名）を分析対象とした。親の評価による ADHD-RS は STP 後に大きな改善を示しており、親の気分、感情も改善されていたが、QOL 尺度から見た STP の評価は低い結果となった。子ども QOL に比べて親 QOL 評価が低く、母親の精神状態が QOL 評価に反映することが示唆された。

A．研究目的

ADHD 児と家族の包括的治療法である、くるめ Summer Treatment Program(STP) は今年で 9 回目を迎え、現在まで 232 名の学童が参加した。2 週間プログラムの個人・グループ別行動評価、心理・認知機能検査、および保護者へのさまざまな質問紙データが蓄積されてきており、行動面に関する短期効果や認知機能の改善について報告してきた¹⁾。

ADHD 児の治療に保護者の適切な関わりが重要で、保護者のレジリエンスに影響する様々な因子が STP の効果持続にも関係する可能性がある。今回、STP 介入前後で

保護者のレジリエンスに関係しうる心理的尺度：日本版 Profile of Mood States (POMS), Kid-KINDL 小学生版 QOL 尺度、保護者・子ども版)の変化の検討を行った。

B．研究方法

対象は、2009～12 年にくるめ STP に参加した小学校 2～6 年の子どもとその保護者で、子どもには、「小学生版 Kid-KINDL 小学生版 QOL 尺度」、保護者（すべて母親が回答）には、「親版 Kid-KINDL」ADHD Rating Scale (RS)、日本版 POMS 短縮版を用いた。POMS は、「緊張」「抑うつ」「怒り」「活気」「疲労」「混乱」の 6 つの尺度から気分や感

情の状態を測定するもので、介入前後の気分、感情の変化を測定することが可能である。

C . 研究結果

親子ペアとともに3回(参加前:7月下旬、参加後:9月上旬、3か月後:12月上旬)のデータがそろっていた54組(男児48名、女児6名)を分析対象とした。

自閉症スペクトラム障害、学習障害などの併存を認めた子どもは14名で、いずれの尺度も男女、診断名による差を認めなかったため、親子54名まとめて分析した。子どもQOL、親QOLともに多くの領域で古荘らの報告による一般健常群の得点と比べて低い値であった(現在詳細分析依頼中)。

1) STP参加前データ: ADHD-RSと子どもQOLとの相関は少なく、ADHD-RSと親QOLでは、不注意項目との相関が中等度認められた。また、ADHD-RSと親POMSに中等度以上の相関が認められた。POMS得点が高い母親ほど子どものQOLの評価を低く見積もる傾向があった。POMSと子どもQOLとでは、全ての項目において相関を認めなかった。

2) STP参加後の変化: 親QOL得点は、身体的健康で有意に得点が増加し、総得点、自尊感情で増加傾向差を認めた。精神的健康、家族、友達、学校生活では有意な変化は認めなかった。子どもQOLでは、総得点、精神的健康、家族、友達の領域で有意に得点が増加していた。QOL尺度の親子の差異をSTP参加前、参加後、3か月後で検討したところ、一貫して学校生活尺度で子ども

QOLよりも親QOL得点が有意に高く、STP参加後では家族尺度で、子どもQOL得点よりも親QOL得点が有意に低かった。親子ともに自尊感情の得点が決他の領域に比べて低かった。母親のPOMSは、全ての領域でSTP参加後、POMS得点が低下した。活気尺度は増加した。母親のPOMSの1項目でも75点以上の要治療群の母親が9名いて、STP後に全ての領域でPOMS得点の低下、活気の増加が認められた。

なお、保護者評価ADHD-RSの不注意、多動衝動性得点とともに参加前と比較して、参加後、3か月後で有意に改善していた($p<0.05$)。

D . 考察

親の評価によるADHD-RSはSTPによって大きな改善を示している。親の気分、感情も望ましい方向に変化し、維持されている結果になった。一方、QOL尺度からみたSTP効果の親評価は低い結果となっている。

子どもの行動やQOLの評価は常に客観的なものではなく、評価者(親)の精神状態が反映されることも示唆されている。QOL尺度からみた子ども自身によるSTP評価は良く、親による評価より高い結果となっている。以上のことから、STPは子ども、親共に効果は認められが、子どもの評価と親による評価の差異について理論的な枠組みも含め検討が必要と思われる。

E . 結論

STP前後の親の評価によるADHD-RS、親の気分、感情、QOL尺度から見たSTPの評価と親のレジリエンスとの関係を明確

にするために、来年度の STP 前後に本研究班で開発したレジリエンス尺度を用いた検討、対照群として STP に参加していない ADHD 児をもつ保護者に同尺度評価をして比較検討する必要がある。

研究協力者（所属）

弓削康太郎、大矢崇志、永光信一郎：久留米大学医学部小児科

岡村尚昌：久留米大学高次脳疾患研究所

江上千代美：福岡県立大学看護学科

穴井千鶴、多田泰裕、向笠章子：NPO 法人くるめ STP

古荘純一：青山学院大学教育人間科学部

松石豊次郎：久留米大学医学部小児科、久留米大学高次脳疾患研究所、NPO 法人くるめ STP

参考文献

1) Yamashita Y, Mukasa A, Anai C, et al. Summer treatment program for children with attention deficit hyperactivity disorder: Japanese experience in 5 years. Brain Dev. 2011; 33 (3): 260-267.

F．研究発表

1．論文発表

1) 山下裕史朗．子どものレジリエンスを高める．チャイルドヘルス 2013；第16巻 第4号：p．218．

2．学会発表 なし

G．知的財産権の出願・登録状況 なし

1．特許取得 なし

2．実用新案登録 なし

3．その他 なし